

## 罪を犯したあなたへ



「私を愛して。自分を愛して……。だけど、二度と帰ってこないで。それがあなたのためだから」

---

「どうして僕は死んだのでしょうか。本当に僕はあなたの言うように、罪を犯して、この場所にやって来たのでしょうか」

青年が一人泣いている。分からぬ罪に怯えて、足ががくがくと振るわせて、自身を裁く高貴な存在に怯えて、何もできずに床に崩れている。

「そう。あなたは生きていた頃、重罪を犯した。償いきれない罪を」

緑色の髪をした少女が、青年にそう呟く。

「私はどんな罪を犯したのですか。私には生きていた頃の記憶がありません」

「死んだ人間、特に特殊な罪を犯した人間は、このゆりかごの墓場に来るのです。死んだ者に生きていた頃の記憶は存在しない。ただあるのは、償いきれなかった罪と、現在この場所で果たすべき責務のみ」

「僕はなぜ死んでこんな所にいるか分からない。聞いていけば、あなたは僕のことを罪人扱いしているようだ！なぜ私は天国ではなく、あなたの言うゆりかごの墓場にいるのですか！」

「あなたの罪、つまりは人を殺したことにより重罪と判断され、このゆりかごの墓場に君の魂が導かれた」

「そんな、人殺しの罪だなんて。僕は、僕は」

青年は緑色の髪をした少女を凝視する。自分は人殺しの罪により、このゆりかごの墓場に導かれたと知ったからだ。青年には生きていた頃の記憶がない。実はもう青年がいるのは現世ではないこと、そして現世では償い切れない罪を犯したことを宣告された。

青年は今、宮殿のような場所の中にいる。中には豪華なシャンデリアが備え付けられており、少女もかなり豪華なドレスを身にまとっている。この宮殿もゆりかごの墓場の一部らしい。



「僕が人殺しをした。そんな。そんなことを僕が！じゃあこの場所は、そんな私を裁くための地獄だと言うのですか！」

「ここは天国ではない。そして地獄でもない。君は私達、天上界の者のルールを知らない。人間は、死者は天国か地獄かどちらかに行くと考えているようだが、実はもう一つある。このゆりかごの墓場だ。この場所は、地獄同様に、罪を犯した人間に罰を与え、更生させることを目的に作られた」

「では、僕はこの場所で、罪を償うためにこれから罰を受けなければならないのですか」

「もちろんだ」

信じられなかった。青年には記憶がなく、気づいたらこの場所にいた。そして話は進み、このゆりかごの墓場で更生に向けて、様々な罰を与えられるというのである。青年はこの場所の目的を知り、今すぐ逃げたくなった。これからどんなに辛いことを強制されるのか、不安で仕方なかった。

緑色の髪をした少女は、ここは天国でも地獄でもないと言った。しかし、地獄同様に、罪を犯した人間を裁く場所、償いをさせる場所であることは変わらないらしい。

「信じられない。僕は今でも自分が人を殺したなんて信じられないんだ！」

「君が人を殺したのは事実だ。無惨にも、毒ガスを密閉された空間に充満させて殺した」

「そんな。僕はそんなひどい方法で、人を」

「素直に受け入れろ。そして償え、自分の罪を。君に今から罰を与える。そしてこれからも、あらゆる刑罰を与えられることになる。こちらに来なさい」

「やだあ！僕は、そんな、引っ張るな！やめてくれ、何もやっていないはずだ」

少女は青年の腕を無理やり掴む。青年はこれから罰を受けに行くことを知り、震えあがる。少女から、毒ガスを密閉された空間に充満させて人を殺したと伝えられた。青年は今もそれを信じられず、知らない罪に怯え、連れていかれることを拒否する。しかしこの天上界の少女の力は強く、青年は力負けしてある場所に連れていかれた。

「やめてくれ、どこに連れて行く！」

「さあ、この扉を開ければ、君は1つ目の罰を与えられる」

少女は大きな扉の前に青年を誘導した。この扉を抜けたら1つ目の罪が与えられる、そう少女は宣言する。

「さあ、着いたわ」

「真っ暗で何も見えない。一体僕はどこにいるんだ！」

扉を開けたると、そこにはまた別の部屋が存在した。しかし中は真っ暗で何も見えない。

「ここに椅子があるから座りなさい、青年」

「どこにあるんだ、イタ、足をぶつけた。何も見えない。もしや、この椅子に縛り付けて拷問をする気か！分かったぞ、この椅子は電気椅子か何かか！」

「いいから座りなさい。君には罰が与えられるとあったでしょ。逃げられないよ」

「やめてくれええ」

青年は無理やり真っ暗な部屋に連れていかれ、さらには椅子に座ることを強制される。ここで拷問を受ける、そう確信した青年はジタバタと暴れるも、少女に押さえつけられて、とうとう座ってしまった。

「くそ、逃げられない。助けて、助けてくれええ」

「さあ、電気を付けるわよ。これが初めに与えられるあなたへの罰」

そう言って、少女は部屋の電気を付けた。それと同時に、青年は少女から口に何かを突っ込まれる。

「さあ、お食べなさい」

「んんん！？」

青年は急な出来事に困惑している。あれ程青年は少女に怯えさせられ、真っ暗な部屋で拷問されると思っていたからだ。しかし、少女は電気を付け、気づくと青年は、スプーンで取った食事の一部を口に入れられていた。



「おい、急に何をやる、毒か何かか！」

「違うわよ、黙って食べなさい、もう。お腹すいてるでしょ」

「こんなもの！やめろ、無理やり口に入れるな！こんな、こんな。ん？あれ？美味しい……」

青年は最初、毒を盛られた食事を無理やり食べさせているのかと思った。しかし、同じ食事を少女も食べている。スプーンは1本しかなく、少女が取った食事を青年に食べさせ、同じ食器を使って自身も食事をしている。

「なんのまねだ、お前」

「なんのまねって、お腹すいてるでしょ。私も怯える君を見てると疲れてしまって、お腹が空いてきたからご飯を食べてるのよ」

「お前は僕に罰を与えると言ったはずだ」

「そうよ。あなたは食事を取って、その美味しさで心を満足にさせられる罰を与えられてるのよ」

「そんなのおかしすぎるだろ。僕は聞いた所によると、人を殺した罪でこのゆりかごの墓場にいるそうじゃないか。なのに、呑気に食事なんて」

「本当に疑り深いのね。ほら、このピラフも美味しいわよ。お食べ」

「ふざけるな。また無理やり口に入れて！やめろ、やめ、ん？美味しい」

「なら良かった！」

少女は次から次へと机に食事を並べ始めた。青年の好みを把握しているのか分からないが、どの料理も食べたことのないくらい美味しく、最初は拒んでいた青年も、次第に自分から食事を求めるようになった。

「なんでこの料理はこんなに美味しいんだ。疑いは晴れないが、でも、正直お腹も空いた」

「もう、疑ってばかりね。美味しいのはだって、天使の雫でご飯を作っているからよ」

「天使の雫？分からないな」

「天使っていうのは、このゆりかごの墓場に住まう少女達のことを言ってるの。私もそうよ」

青年は違和感を隠せずにはいられなかった。天上界を構成する天国、地獄、ゆりかごの墓場。この内、ゆりかごの墓場は地獄同様に、罪人に対して罰を与えられる場所である。そして、なぜそこに天使と呼ばれる少女達が住まうのか。天使は天国にいるものであろう。しかし、なぜ地獄のように罪人を裁くこのゆりかごの墓場に「天使」と呼ばれる者がいるのか、不可解でしかたなかった。

「色々聞きたいことが出てきた。しかしまず聞いておきたいのは、天使の雫とはなんだ？」

「それはもう言葉通りの意味よ。天使の雫がこの料理に入っているの。それはもう、天使そのものの浄化された清い純潔の聖水で、全ての者に癒しを与えられるわ。君、日本と言う国のオオゲツヒメという神様を知らないの？」

「オオゲツヒメ？」

「そうそう。スサノオって神様に殺されちゃったんだけど」

「何、殺された？何をしたんだ」

「食事を与えたのよ。美味しい食事を。私達天使も同様の力を持っているのよ」

青年はそのオオゲツヒメという神様を知らなかった。しかし、スサノオという神様の名前は、若干聞いたことがあったような気がした。

どうも美味しい食事を与えて殺されたいらしい。なんで美味しいものを与えて、殺されるのか。

「まったく、あのオオゲツヒメちゃんも不憫だわ。スサノオなんていう愛のない男に殺されて」

「なんで美味しい食事を与えて殺されることになるんだ」

「オオゲツヒメちゃんは、自分の身体からそれはもう絶品の食材を生み出すことができるんだよね。たとえば、口とかお尻とか陰部に手を入れると、そこから美味しい大豆とか麦とかが取れるのよ。神話で聞いたことないの？ああ、記憶ないんだったね」

「口とかお尻、陰部から食事を取りだす！？汚いじゃないか。それはスサノオも怒るでしょ」

少女から話の全てを聞いた。どうも日本という国の日本神話に出てくるオオゲツヒメという神様は、スサノオに殺された。美味しい食事を与えて、ではなぜ殺されたかと言えば、陰部やお尻から食事を取りだすという、特殊能力が原因であった。特殊能力にも程があるだろう。

「いやちょっと待って待って待って。お前さっき、天使も同じ能力を持ってるって言ったよな」

「そうよ。だから何度も言わせないでよ。この食事には天使の雫が入っているの」

「嫌な予感がしてきたあ！その天使の雫、その正体は一体……」

「何って、天使達の愛液に決まってるでしょ、こうやって取るのよ」

そう言って少女は、急に下半身を露出し、自身の愛液をぶちまけ始めた。



「ふはああ。きさ、貴様ああ！特殊性癖過ぎるだろ！オオゲツヒメと言い、お前といい、神様とか天使にろくなやつはいないのか！やっぱり毒を入れてやがったな！」

「君い！人の愛液を毒だなんて失礼だろう。でも、素直に美味しいと言ってくれたのは嬉しいわ」

「この変態野郎が。畜生、とんだ所に来てしまった」

「本当に失礼な男の子だなあ。ほら、食べてみれば美味しさが分かるさ」

「ふはあ。ふざんけんなあ、んん、美味しい、いや駄目だこんなもの食べては、ん、ん、美味しい……」

少女から無理やり愛液を口に入れられ、青年は本気で抵抗する。しかし、抵抗虚しく口にそれを入れられていく内に、不思議と身体がふわふたとし、力が抜け、次第に落ち着て気分が良くなってきた。

「なんだこれ、さっきまであんなに嫌だったのに。不思議と身体が軽くなって、気持ちがよくなってきた」

「それはそうよ。この天使の雫には、罪を犯した人間が不安な気持ちにならないように、鎮静効果があるの。しかも、幸せで心が満たされるような感覚に襲われるはずよ。これが天使達の力の1つなの」

先ほどまでとは打って変わって、青年は少女に感謝がこみ上げてきた。多少何やっているんだとイライラする気持ちもあるが、鎮静効果のあるこの天使の雫は、青年の身体に優しく浸透していった。それと同時に、青年の身体は少し火照り、先ほどまでの不安はどこかに消し飛んでしまった。

「最初はびっくりしたけど、正直、凄い落ち着いてきたかも……」

「そうでしょ。どう、結構お腹空いてたみたいだけど、いっぱいになった」

「うん」

「なら良かった。お腹もいっぱいになったみたいね。だけど、今日の罰はこれだけじゃないの」

「まだ何かあるのか」

「そうよ。今度は隣の部屋に移るわよ。最初に私が中で着替えるから、合図したら入って来て」

青年はまたも困惑した。今日の罰はこれだけではない、そう言われたからだ。しかし、さっき飲まされた天使の雫の効果か、あまり不安はない。

少女は先に部屋に向かい、着替えを済ませる。そして、青年に合図をした。

「もう入って来ていいわよ」

「もういいのか、入るぞ」

そこには青色の服に着替えた少女が、とんでもない恰好をしてベッドの上にいる。頭と胸をベッドに付け、腹から足をぐるんと自分の頭の上を通して前に突き出している。さらに、ちょうど肛門を隠すように綿が付いたボールがアナル表面に存在し、女性器の筋を隠すだけの面積しかないパンツが彼女の性器を隠していた。

「なんて恰好してるんだよ」

「いいじゃない。今日の2回目の罰を与えるわ。私に愛されなさい」

「どういう意味だ。さっきから罰と言いながら変な事ばかりして」

「どうって、そのままよ。愛されなさい。愛されることが、あなたの罪に対する罰なの」

青年は困惑した。なぜ人を殺した僕はこの少女に愛されなければいけないのか。全くの意味不明だった。しかし、そんな困惑している青年を置いて、少女は続ける。

「今日から、私とあなたは恋人になるの。そして、あなたが心から幸せになり、満たされ、そして私のことを本当に愛して一人前の男になる。それができるまで、この罰は終わらない

その日、青年は少女とセックスをした。なぜ人殺しの青年に与えられる罰がセックスなのか理解できなかった。なぜこの少女に愛されることが罰なのか、分からなかった。

しかし、少女は激しく青年を誘惑した。女性器がちらっと見えそうなパンツを履いて青年を誘惑し、そしてパンツを脱ぎ、青年と性行為に励む。

「こんな僕がなんで。ん、あっ、気持ちいい」

「そうでしょ。この愛液である天使の雫は、あなたのペニスの感度も上げる効果があるのよ。今日は私がリードしたあげる。気持ちよくなってね。そして、幸せになった。私だけじゃなくて、自分も大切にしてください」

「なんでこんなに僕に優しくしてくれるの？」

「あなたが大切だから。このゆりかごの墓場にいる天使みんながあなたを心配しているのよ。だから君は、幸せになる罰を与えられるの」

少女とのセックスは非常に気持ち良かった。少女が青年をリードし、最初は青年のペニスをゆっくりしごいてあげた。その後は優しくキスをしながら、互いの唾液を混ぜ合い、彼のペニスを優しく手に乗せて、少女自身の性器に入れた。

彼女の女性器のなかはとても柔らかく、しかし意地悪に青年のペニスを締め付け、刺激を与える。

「凄い、気持ちいい」

「もっと気持ちよくなりなさい」

少女と青年のセックスは3時間にも及んだ。最初は1時間程に彼の性的興奮が高まり、射精してしまいそうになった。しかし、睾丸付近を強く握られ、さらに龟头付近への刺激が止められ、射精しそうにもできない。青年は射精したさに少女に懇願する。唇を少女に近づけ、舌を彼女の中に入れる。もっと気持ちよくなりたい、射精したい。もっとペニスを刺激して欲しいと。そして青年は自発的にペニスを少女の女性器に入れ始めたのだ。

「あら、気持ちいい。自分で入れたくなったの？」

「本当に気持ちいい。射精するところだったのに、止められたから、我慢できなくなった」

「じゃあ、君の力で私を気持ちよくさせて。そして自分に自身を持って。自分を愛して。それがあなたへの罰だから」

少女の言っている罰の意味は理解できなかった。しかし青年は少女とのセックスに夢中になり、途中からは少女を自分からリードするようになった。

最初は腰を振る動きも慣れなかったものの、次第に手馴れて、彼女の性感帯に龟头で刺激を与えられるようになり、今日会ったばかりの少女の女性器の中に、射精した。



「射精してくれたんだ、嬉しい」

「僕も気持ちよかった」

「自分に自信持てた？本当に気持ちよかったよ」

少女は青年にお礼を言い、2人は眠りについた。

---

そして、美味しい食事をして、2人は愛し合い、幸せな日々を約1年間も送ることとなった。

青年は次第にこのゆりかごの墓場にいることすら忘れ、罪の意識を忘れ、罰を与えられていることを忘れた。

2人の1年間は本当に幸せなものだった。ゆりかごの墓場には、数多くの天使達がいた。青年はその天使達と仲良くなり、セックスをした少女と一緒に食事をしたりもした。宮殿の裏には美しい花が咲き乱れ、一緒にお昼寝をして過ごしたりもした。

こんな幸せいつまで続くんだろう、そんなことも気にせず、全てを忘れ、青年と少女は幸

せな日々を過ごす。時にセックスをして、彼女の性器を愛撫し、愛情を確かめあう。こんな生活が無限に続けばいい、そう考えるようになった。

しかし、青年がこのゆりかごの墓場に来てから1年、少女は青年にあることを伝える。

「実は今日、話があるの」

「なんだい、今日は遠くの山の上で、星空でも眺めたいのかな」

「いいや違う。こっち来て」

少女は青年を巨大な扉の前に連れて行った。

「この扉、なんだと思う？」

「なんだろう。もしかして、この扉を開けると、綺麗な花畑が広がっていたりして」

「違うの。この扉は現世に繋がる門。あなたがこの扉の中に入れば、罪を償ったことを認められ、再び現世に戻った後、清く生きれば天国に行くことができる」

「そんな急に！現世に戻る門だって……。もっと君と一緒にいたいのに、なんで！」

「あなたが罪を償ったからよ。私ももっとあなたと一緒にいたい。この1年間、私を愛してくれて、本当に感謝している。だけど、私はゆりかごの墓場に住む天使として、使命を果たさなければいけない」

「嫌だ！まだ君と一緒にいたい。まだまだ話したいことがあるんだ。それなのに」

青年は泣き崩れた。最初このゆりかごの墓場に来た時、青年は彼女が恐ろしかった。自分の罪に罰を与える存在、そう聞いたからだ。しかし、それは誤解だとその日の内に理解した。

それから毎日彼女と子供のように無邪気に遊び、セックスをして、愛情を確かめあった。それなのに、彼女は今日、この場所で青年に現世に帰るように促した。

「これが本当の罰だ。愛している君と別れなければいけないなんて。このゆりかごの墓場に来て、一番苦しいのは君との別れだなんて」

「ごめんなさい。私もずっとあなたと一緒にいたい。キスをして、セックスをして愛し合いたい。だけど、ダメなの。あなたが罪を償い、現世に帰れるようにするのが私の務め」

「何が罪の償いだよ！僕は一年間、君との幸せな日々を過ごただけじゃないか！」

青年の言う通り、1年間、幸せな日々を送り、罰と考えられる出来事を彼は体験したことがなかった。人を殺した罪人に与えられる罰とは思えない、そんな1年であった。

「僕は一体何をしたんだ！ずっとそれを知りたかった！」

「あなたは、私の愛するあなたは人を殺したの。そしてその罪を償うため、このゆりかごの墓場に来た。来てくれた」

「どんな殺し方をしたんだ。僕は一体！？」

「前に言ったのを覚えていない？あなたは無惨にも、毒ガスを密閉された空間に充満させて、殺したのよ」

「誰を、誰を殺したんだ。君が愛する僕は、一体誰を殺すような酷い事をしたんだよ！」

青年の怒りがピークに達した。なぜ人を殺した青年のことを少女はこんなに愛してくれるのか。なぜ毒ガスという惨い殺し方をした青年に苦痛を伴う罰を与えず、キスをし、セックスまでしてくれたのか。

「あなたは私の大切な人の命を奪ったのよ。この映像を見て」

少女は天使の力で、青年の頭の中に、ある映像を映した。

「ここは、山奥？」

青年が見ている映像は、どうも山奥のようだった。緑が生い茂り、その中には一台の車が木の横に駐車していた。そして少女がその車の中を見るように促す。

「その車の助手席を見て何が見える？」

「これは、練炭？凄い燃えてる、車の中で」

「そう。密閉された車内で練炭を使うと、猛毒のガスである一酸化炭素が不完全燃焼で発生し、それを吸い込むと、高濃度の場合は短時間で死に至るわ。次に運転席を見て」

「これは、なんで僕が運転席にいるんだ」

山奥に止められた車の助手席には、大量の練炭が設置され、燃やされている。密閉空間で練炭を燃やすと不完全燃焼で猛毒な一酸化炭素が発生する。一酸化炭素が充満した車内にいた場合、短時間で死に至る危険性がある。

そんな車の運転席に、青年は座っていた。よく見ると、彼の口からは大量の泡が吹き出し、舌はだらっと垂れさがり、ぐったりとしている。

「あなたは山奥の中、練炭自殺で亡くなったわ。この1年間、愛して愛してしようがなかったあなたは、こんな最期を迎えたのよ」

「僕が殺した相手は、僕自身、なのか……、そんな」

ここで少女は畳みかける。

「今ここで扉をくくれば、人生をやり直せる。あなたが死ぬ30分前、つまり練炭を燃やし始める前の車内のあなたに意識が移るわ。そしてもう一度やり直すの、今ここで」

「そんな、僕が自殺だなんて。信じられないよ！」

「なら、あなたの記憶を今この瞬間から解放するわ」

そう言って、少女は青年の頭に優しくキスをした。その瞬間、彼の頭の中に、フラッシュバックのように記憶が蘇ってきた。

「ああああああ、僕は、僕は。新卒で会社に就職して、続かなくてやめて、ニートになって、親に迷惑を掛けて。そして、うつ病になって、死んだんだ」

今ここにいる青年、それは悲しくも辛い経験をして、自殺をした魂そのものであった。

「本当に現世に帰りたくないの？じゃあこれを見て。この映像は、あなたが亡くなり、警察が発見され、あなたの母が遺体を目にした時のものよ」

「お母さん！ああ、ああ」

自分の子供の遺体を目にした母は、その場で崩れ去り、そして立ち上がったかと思えば、心臓マッサージを始めた。周りの人は母親に、もう亡くなっているんだと説得する。そして母を青年から引き剥がそうとした瞬間、母は相手を押し倒し、再び青年に心臓マッサージを始めた。それは1時間20分にも及んだ。

母親は途中から、青年は亡くなったんだ、そんなことは理解していた。しかしその現実を信じ切れず、死んでもなお優しい顔をしている青年を眺め、自慢の強い子を思い出しては、息を吹き返すに決まっていると自身の妄想を信じ、心臓マッサージを始める。そして、諦めてはその葛藤を繰り返し、それが1時間以上も続いたのだ。

次第に母は、蘇生を図る息子が、どうしようもないぐらいに冷たいことに気づいた。こんなに顔は優しく温もりを感じるのに、身体は冷たくなり、真冬の剥き出しのコンクリートに触れているようだった。

母は途端にその場に崩れ去り、目は虚無と化し、既に息子ではなく、周りの親族を見るようになった。誰か嘘だと言ってくれ、なぜお前らはそんなに平然としてられる、そんな気持ちであった。

「僕のせいだ」

青年は自分の母親に謝罪する。そして、愛する少女に助けを求める。

「僕はどうすればいいんだ！」

「大丈夫よ、あなたはとても優しい男の子よ。今、この扉を開ければ、死ぬ前のあなたに意識が移る。そしたら、すぐさま助手席の練炭を捨て、あなたの母の元に急ぎなさい」

「でも僕は思い出したんだ！僕は会社をやめて、ニートになって、母に迷惑をかけて、どうしようもなく、だから死んだ！」

「馬鹿なこと言わないで！」

少女は青年の顔に平手打ちをした。

「思い出して。あなたは私が愛する自慢の男性なの。そしてあなたは私を幸せにしてくれた。私を愛してくれた。あなたは人を幸せにできる優しく強い子なの」

「でも、それでも母に迷惑をかけて。きっと、僕のことを嫌いになって」

「それが馬鹿だって言ってるの。もう一度見なさい。あなたの遺体に一生懸命に心臓マッサージをする母の姿を。ニートになって、散々迷惑を掛けたその母は、あなたを見捨てたと思うの！？本当にこの姿を見て、そう思えるの！？」

青年の頭の中には、一生懸命に自分の子に心臓マッサージをする母の映像が流れた。その母は、人生で一度も見たことのないほど真剣だった。家ではダラダラとしていて、運動もあまりしないため手足は細い。だけど、そんな母が自分の細い腕で、折れてしまいそうなのに強く、心臓に刺激を与える。母の腕には普段は見えない血管が浮き彫りになり、全力で息子の心臓を押しているのが分かった。

「どう？あなたの母は、子供に失望して、見捨ててしまったと思う。この母の姿を見れば、分かるでしょ」

「見えない。見えないよ。母が可哀想だ。なんで、こんなに僕のために泣いてるんだあ」

「そう。あなたの母は、迷惑なんて気にしない。いや、それは言い過ぎかもしれない。迷惑を掛けたら少しは怒るよ。だけど、それを死に対する評価と関連付けて、母を弱くみないで。お母さんにとっては強いだよ。現世に戻りなさい。今すぐ」

「戻りたい。戻りたいよ。でも、君だけが心配なんだ」

「私もあなたと一緒にいたい。愛するあなたと。だけど、私はこんなにも毎日幸せをあなたと享受してきたのに、あなたの母はこんな息子の最後を迎えてそのまま死ぬなんて、悲しすぎる。

だから今度は、母を幸せにさせてあげなさい。私を幸せにしたあなたなら、きっと、いや絶対にできます。自信を持ちなさい。自分を愛しなさい。あなたならできるわ」

「母を幸せに……」

「私を幸せにしてくれたあなた自身をもっと評価して、もっと自分を愛して、自信を持って！」

少女は青年を抱きしめ、唇にキスをした。青年も優しく口づけをし、自分からドアの方を

振り向いた。一瞬、少女が青年を繋ぎ止めるように背後から抱きしめるも、その後ゆっくりと2人で一緒にドアの方へ歩み寄り、現世とこのゆりかごの墓場との門を開く。

「ありがとう、本当に楽しかった。もっと君と一緒にいたい。愛し合いたい。だけど、こんどは母を愛して、育ててくれた恩返しをしないといけない。これから、母に心配かけてごめんって謝って、いっぱい怒られて、そして幸せにしてくる。絶対に約束する」

「私も、あなたと過ごした時間は本当に幸せだった。

ただあなたに、聞いて欲しいの。また自殺してしまえば、再度このゆりかごの墓場に来てしまう。だけど、そんなことしないで。遠く離れていても、もう会えなくても、あなたと私の愛した日々が消えることはない。

だから、最後にあなたに言います。

二度と私の前に現れないで！そしてもっと自分を愛して！私の事を決して忘れないで！

だって、本当はずっと離れたくないぐらい、あなたを愛しているから」

青年は扉の中へと静かに消えていった。

